

【緑爽会3月例会】 羽村堰・お花見会

日時：3月27日（木）午前10時（雨天中止）

集合場所：JR青梅線羽村駅改札口（西口）

行程：

1. 往路（JR青梅線・羽村駅西口→羽村堰）

羽村駅西口→（禅林寺）→羽村堰玉川兄弟

徒歩20分 徒歩10分

像（お花見の基点）WC

2. 羽村堰玉川兄弟像（WC）を起点としたコース

① 徒歩往復1時間+見学・休憩

玉川兄弟像→多摩川左岸土手（お花見）→水上公園（WC）

上流へ徒歩15分

→根掘み・チューリップ畑

→一峰院→阿蘇神社（シイの古木があった）WC→多摩川左岸

徒歩10分

下流へ徒歩15分

土手（お花見）→水上公園（WC）→多摩川左岸土手→玉川兄弟像

② 徒歩往復1時間+見学・休憩（浅間岳は時間のある場合）

玉川兄弟像→堰下橋→多摩川右岸土手→（昼食）羽村市郷土博物館（WC）

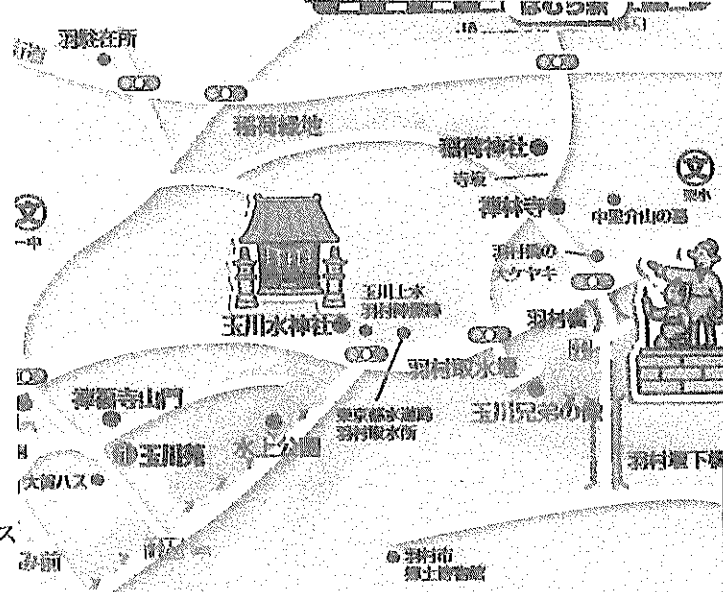
上流へ徒歩25分

登り徒歩20分浅間神社

羽村市郷土博物館（WC）→（昼食）浅間岳253m 登り徒歩15分

3. 帰路（羽村堰→JR青梅線・羽村駅）は、1. 往路の逆コース

●申込・問合 西谷隆亘 ☎042-555-6232 または松本 ☎F 03-3326-2892



地元の西谷夫妻の案内で、お花見かたがた治水や魚道を考えます。

競っています。江戸開幕から50年後の1653年、羽村の取水堰から四谷大木戸までの43kmに掘割（玉川上水）が作られました。いま、羽村堰には200本の桜が植えられ、春には玉川兄弟の功績を讃えるかのように咲き競っています。

春らんまんの多摩川で会いましょう
1月は七福神めぐり、2月は山岳会史を勉強、次は



緑爽会報 NO.125

'14年 2月27日

発行

公益社団法人

日本山岳会 緑爽会

☎ 03-3261-4433

事務局

松本恒廣

夏原寿一

近藤雅幸

近藤 緑

川口章子

渡部温子

福原好子

『正月山行報告』

武蔵五日市七福神めぐり

近藤 雅幸

お正月気分もようやく抜けた1月21日。幾分寒さも和らぎ、ちよūdよいくらいのウォーキング日和である。お天気もとりあえず昼くらいまでは持ちそうだし、気持ちよく七福神めぐりが楽しめそうだ。

武蔵五日市駅の改札前に集まったのは緑爽会のメンバー10人。駅横の観光案内所が開くのもどかしく、パンフレットをもらって七福神めぐりにかけた。

まずは車がひっきりなしに行きかう国道を避けて閑静な住宅地の中の道を行く。時宗の寺、正光寺まではほんの一投足だ。弁天様が本堂前の小さな祠の中に佇んでいる。次は旧街道を歩いて大悲願寺へ。川沿いの道を歩き、階段を登り、JR五日市線の踏切を渡って山門をくぐると、そこは歴史の香りに満ちた境内だ。寺務所玄關の扉を開けると、大黒様が笑いかけてきた。大悲願寺は東京近郊でも数少ない自然の残る谷戸、横沢入りの入口近くにあるため、メンバーの中にはそこを訪れたついでに立ち寄ったことのある人も多い。隣には西谷さんの大学の同僚が設計したという一風変わった幼稚園もあり、証題が尽きない。

一旦、武蔵五日市の駅前に戻り、今度は五日市街道を西に向かう。恵比寿さんは路傍の地藏堂の中に押し込められたようで不慣れなありさま。その先で同じような地藏堂の中で肩身の狭い思いをしている毘沙門天を拝み、坂を下るといか



光蔵寺の布袋様の傍で 撮影 小泉義彦

にも禅寺らしい玉林寺の境内である。庭の中にある祠を覗くと福祿寿がこちらに微笑みかけてくる。

秋川を右岸にわたると雰囲気ガラッと変わり、川辺の森の中を行く静かな小径となる。ところがしばらく歩くと行く手に通行止めのロープが張ってある。その先に崩壊しているところがあるらしい。結局、川沿いに行くことをあきらめて、山道を行くことになってしまった。しかし街歩きに飽きかけていたメンバーにとっては、願ったりかなったたりだ。

再び道路に出て沢戸橋を渡ると、今日の昼飯はここで決めていた五日市ほうとうの店がある。甲州のほうとうとは少し違う味に舌鼓を打って、すっかり満足した。お次は城山の中腹にある光蔵寺。かなりの高台にあるので登るのに息が切れる。

お寺のわきには城山桜が大きな老体をさらしている。それを見てそれぞれに勝手な感想を言い合った。山門をくぐると、脇で

布袋様が大きな腹を突き出している。ついでに撫でてみたくなるような腹だ。もちろん誰もがこの集合写真はここを指してほかにないと思った。真ん中に布袋様。彼を取り囲んで「はいチーズ」。

光厳寺から坂を下りた麓には、銘酒喜正の野崎酒造がある。以前ここで試飲をさせてもらったことがあるので、期待して入っていると冷たい口調で今は試飲をさせていないという。そんなうまい酒でもないし

● 図書紹介

中村好至恵さんの

画文集『心に映る山』に寄せて

いつも緑爽会々報にさりげなく挿絵やスケッチを提供してくださる中村好至恵さんが、初の画文集『心に映る山』を上梓された。中村さんとの付き合いは、2011年の秋、ロッシ山旅に合宿して『北八つ彷徨』の著者山口耀久さんからお話を聞く会を催したとき、たまたま日野春アルプ美術館で個展を開催中だった彼女が同宿して合流、翌日山行組と別れた有志で展覧会を見に立ち寄ったことに始まる。山岳会に入会した彼女を強引に緑爽会に引張ったのは、会の平均年齢を何とか下げたいという思いからだ。

私はかねがね山の雑誌の中では『山の本』がいちばんかっつての『アルプ』を踏襲しているように思っていた。その『山の本』で熊谷樞さんの後を継いで挿絵を担当しているのが彼女だと知って、一層その思いを強くした。

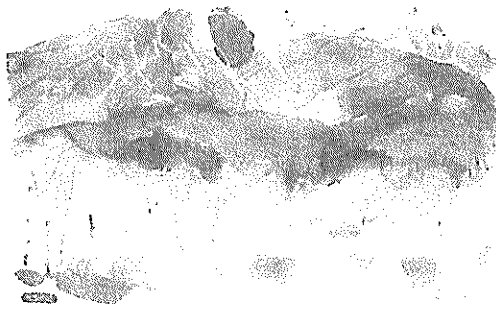
この画文集に登場する山は、いわゆる登山家が目指す高山や岩壁ではない。誰もが足を

もう二度と買うものか。腹の中でそんな捨て台詞を吐いて最後の福の神に向かう。

これがなかなかの遠い道のである。川沿いの道路を延々と歩いてたどり着いたのが徳雲院。寿老人を拜んでやつと結願となった。足を棒にして7人も拜んだのだから、今年はずっといいことがあるに違いない。

「参加者」 松本恒広、大島洋子、島田稔、夏原寿一、瀬戸英隆、川口章子、西谷隆直、西谷可江、小泉義彦 係 近藤雅幸

心に映る山



鳳凰三山 穴山城址あたりより

中村好至恵

踏み入れる丹沢や奥多摩、八ヶ岳周辺が多い。気負った山はないが、自然を愛することにかけては誰にも負けないことは、この本のあとがきに東山魁夷のことばが引いてあることからも察しられる。山との出会い、山小屋とそこで出会った人々との交流、そして一本の樹木、一輪の花にも注ぐ彼女のやさしい視線が感じられる絵であり、文章である。

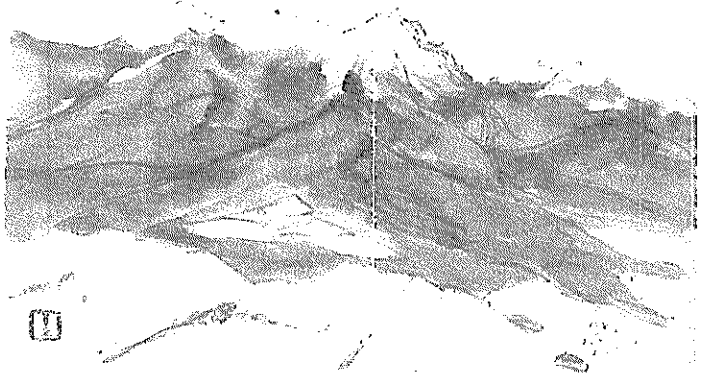
装丁は一昨年の秩父宮賞受賞者の小泉弘氏著者の画文の味わいを引き出して、座右に置きたい瀟洒な本に仕上げている。

かつて水彩画を「みづゑ」といった時代が

あった。従来の日本画と違う技法の「みづゑ」は文明開化の一つの現われであり、ハイカラな趣味だったのだろう。水彩画で尾瀬を紹介した大下藤次郎は『みづゑ』という雑誌を発行していた。日本山岳会草創期会員であり、彼が夭折した後、小島鳥水が『みづゑ』の編集を援けたとも聞いている。

中村さんの絵をみていて「みづゑ」という古めかしい呼び名を思い起こしたのは、春夏秋冬の表情をもつデリケートな日本の山を描くには、水彩画こそがふさわしいと思ったからだ。

緑爽会には同じく水彩画の田辺寿先輩がおられる。戦時中青梅に疎開した大下藤次郎の子息と中学・大学が一緒だったと聞き、「それで水彩画を？」と尋ねたら、「それとは無関係。後で知った」由。今は亡き宮下啓三さんも水彩画を得意とした。あるパーティで、手早く描いたスケッチに赤ワインとコップの水でほんのり色付けされた手際は見事だった。同じく絵心のあった小倉厚さんは、早くから横浜の中村好至恵さんの個展に立ち寄っていたら



守屋山からの八ヶ岳

しい。

その他、版画家の奥野溪石さんを囲むSUN療会のメンバーは、関塚貞亨・渡部温子さんはじめ多くが緑爽会のメンバーである。かつて織内信彦・松丸秀夫兩名誉会員もそれぞれ独自の水彩の世界を楽しんでおられた。

いろいろ思い起こしてみると、昔から諸先輩は山歩きの傍ら、スケッチの筆を走らせ、俳句を嗜むという趣味人が多かった。足の遅い私が追いつくと、先輩方はもう画帖を開いて周囲の写生に余念がなかった。

はからずも『みづゑ』を継承する次世代のホープに心からの期待を寄せている。そして緑爽会の文化的登山の伝統が、彼女によつてますます発展することを祈りたい。(近藤 緑) 白山書房刊 B5変型判 1800円(税別)

後記 ★山梨では観測史上初めてという大雪のため、勝沼の家から一步も出られず、会報の発行も遅れてしまった。山を縫って走る中央本線は、風雨にも弱い、雪にはもつと弱い。列車も不通、幹線道路も通行止め、たちまちスーパーに物が無くなった。ヘリで空輸してやっと店頭で食料が並ぶようになった。★といっても山の家から買いは行けない。しばらくは籠城する覚悟で戸棚の奥から何年も放っておいた乾うどん、小麦粉などを取り出しては食べることばかり考えていた。戦時中と違うのは何日かすれば平常が戻ることを解っていたことだが、雪国の人を思えば何とも恥ずかしい話である。K

